

# プロレタリア通信

No.1

1968

3.25

共産主義者同盟  
書記同盟

共産主義者同盟才七回大会の旗の下、全同盟員との結集と実践とを謀る。大会ポイコツト同盟盟破の第一歩首謀者として断乎責任追及し、同盟の革命の再編と前進を願うとせらる。

共産主義者同盟政治部局を以下の二つが決定された。

共産主義者同盟才七回大会は、早稲田地区に於て開催され、全国からの同盟員の革命的結集のもと、一部日和見分子の大会ポイコツト同盟盟破の危険な結集を粉碎し、大会の全任務を以てし、革命と生活の裏にブルシェヴィキ的發展の出発点を以てし、新正に在りて政治部局は、今大会の革命的意義を再確認し、大会で確立された結集の諸方向にもとづくすべての戦線における階級闘争に全同盟員同志の結束したてを求めると同時に、同盟盟破者に対する非難

の革命的党内斗争を導くこと、革命と党の非業に於て義務があり、かつ緊急の任務であること、期すべし。

一、同盟才七回大会はあらゆる政治的物議の困難を伴うに於て、緊張したる中、

同盟才七回大会は全同盟員資格者〇名中の何となく、〇名を以て成立し、一部日和見分子の結集にもとづく組織された大会ポイコツトにもかわらず、同盟盟及び大会決定教過半の、各々を以て見下の同盟に要求される七回大会任務を遂げて定率した。

一、大会は再建統一以降の全実践を以て、新編



わかれわかれ同盟はまさに二の任務に立ち向ったが、水沢一派はこの斗いに生きずし的にひきずり、二ま水、途中で放棄し、昇天してしまつたのである。

一、水沢一派は自己保身のセクト的利益のため、すなわち大層での論争に耐えることがあらずに、それ以外の口がある理由もなく、大層から脱退し、自滅した。わかれわかれは今後口がある意味においでも、水沢一派にわが同盟を名乗らせではならぬ。これは大層を最後まで斗いぬいたものすべの固有の権利であり、義務である。

一、水沢一派の乱気、是れ戦術——ポイコットはまたしても「採決するなり分裂するぞ」「採決しない」と約束せぬがざり大層には参加しなれしといふ態度を大層に強制し、大層を屈伏させて自己保身するものであった。わかれわかれは断乎大層の原則的貫徹を以て断つたとともに、ポイコットの条件下で彼らの大層結束を最後までねばりよく原則をもつて獲得、追求したことを改めて確認しなればならぬ。

一、同盟盟は革命家と前代範としての正当な怒り

をもつて、水沢一派の責任放棄、大層の責任、首信と裏切りを弾劾する。即時自己批判を行ひ、同盟の根柢に基いた活動に復帰せよ。

一、わかれわかれは、水沢一派の従来の同盟放棄活動を弾劾するの非ならず、その有形無形の根柢に對し、断乎たる無条件の粉砕斗争をもつて臨むことをここに表明する。

一、同時に、水沢一派の異常にセクト的であつた相見を又の大層ポイコットになしなくすし、同盟を離れ、或いは混亂して確信をもつて大層に結束し、存かつた盟の同志諸君に對し、水沢一派との絶縁と自己批判を要求する。同時に、政治的異見の有無にかかわらず同盟への一員した結束と、統一機関、統一組織のもと統一された活動を行うより強く要請する。わかれわかれは七回大層選出中央委員層のもと、すべの同盟機関の活動を現に一歴義力に尾雨していることを明らかにし、これら同志諸君の組織的認識を一新し、同盟盟としての存続を正しく導かねばならぬ。同盟、水沢一派と見出し、同盟する形に對しては、急務的討伐をもつて臨むであらう。

一、全同志諸君、共産主義同盟の結束と当面の反共闘争、即刻水沢一派を粉砕して斗いとう。

政治局は先頭にたつて二の任務を遂行せらう。